

エレクトロニクス技術者の栄光と責任

会長 大越 孝敬



私は昨年 60 歳の還暦を迎え、いつの間にか本会会員の中でも最年長組の一人になってしまいました。その意味で、エレクトロニクス技術者としての半生を振り返って近ごろ懐いている感慨についてお話しすることにも、少しは意味もあろうかと思えます。

だれでも若いときに、一生の仕事を選択する問題に直面して、多かれ少なかれ迷いを経験すると思います。私の場合は 20 歳のとき、随分迷った末に専攻学科として電気工学科を選択したわけですが、そのときの気持は「自分は電気技術者という地味な職業を選んだ。これからは社会の下支えとして働くのだ」というものでした。

昔の社会の雰囲気若くは若い人に言葉で伝えることは、わずか 40 年前のことであり決してやさしくありません。エレクトロニクスという言葉が現れたばかりのころで、電気工学はあくまで基幹工学の地味な一分野でした。理論物理や高分子化学が華やかな時代でした。

更に昭和 20 年代というのは、極度に貧しいなかで新しい戦後世界の構築が論じられた、ある意味で実に夢多き時代でした。いつの日か人類が東西対立をも克服して人類の融和を達成する、との夢が若者を引き付けていました。若かった私は、「電気工学」はそのような夢から最も遠い地味な仕事、と考えていたわけです。

以来 40 余年、社会の中でのエレクトロニクスの地位は既にいくつかの変遷を経てきました。まず 10 年前まで、その重要性はひたすら増大し続けました。10 年前からは生命科学に対する新しい関心の高まりが、エレクトロニクスの影を少し薄くしたようにもみえました。事実、多くの果敢なエレクトロニクス専門家が、生命科学との境界領域に新しい道を拓いてきました。

しかし長期的に見ると、人間社会に直接役立つ基盤技術としてのエレクトロニクスの地位は、ますます強固になっています。特に 1989 年のベルリンの壁の崩壊以来、通信・放送技術、更に一般に電子情報技術が、いまや世界を動かす力を、そして更には人類の融和に決定的な貢献をする力をもっていることが、広く認識されるようになっていきます。

以上の経験から私が特に若い会員各位に申し上げたいことは、以下の 2 点です。第 1 に、これからの数十年間、エレクトロニクスの地位はまだまだ変遷を重ねるだろう、その変化に対応できる柔軟さを身につけてほしい、ということです。第 2 に、情報・通信技術が歴史を動かす場面は、今後ますます増えるだろうということです。その意味でいまや「地味」とは決していえないこの分野で働く栄光と責任を、よろこびをもって自覚して頂けたら幸いと思えます。